

〔研究ノート〕

ドキュメンタリー制作を通した 学びの可能性

——「映像制作実習」の事例——

森 田 良 成

1. はじめに：大学で映像制作を学ぶこと

本稿では、2019年度春学期に筆者が桃山学院大学において担当した授業「映像制作実習」（春学期の金曜1・2限，合計30回）を振り返り，今年度の授業でできたこととできなかったこと，評価すべき点と改善すべき点を整理する。これによって，来年度からの授業をよりよいものにするとともに，こうした授業に関心をもつ教育者・研究者にひとつの事例として記録を公開しておくことで，広く意見・助言を募ることができればと考えている。よって本稿では，ドキュメンタリー制作について学術的に分析したり，ドキュメンタリーのあり方を問うたりするのではなく，授業の具体的な過程を参照可能なものとして記録し公開することを優先している。特に授業前半の手順，すなわち学生たちが企画をある程度具体的なところまでかためて，撮影と編集を実際に進められるようにするまでの過程をやや詳しく記述している。

キーワード：映像制作実習，ドキュメンタリー，撮影と編集，映像メディア

「映像制作実習」を担当するにあたり、たくさんの方々に相談にのっていただいた。次の方々には特にお礼を申し上げたい。桃山学院大学で昨年度までこの授業を担当されていた南出和余氏（神戸女学院大学）には、9年の間、授業についてどのように考え、運営してきたのかを教えていただいた。授業の経験をもとにまとめられた編著¹⁾をはじめ、これまでの学生の作品集を含む多くの関連資料を提供していただいた。田沼幸子氏（首都大学東京）からは、数年来ご自身が担当されてきた演習の授業の経験に基づいて助言をいただいた²⁾。小村知久氏（NHK）からは、豊富な知識と経験に基づいて、大学の授業という限られた時間のなかで映像制作を通して学生に何を伝えたらよいのかを、ともに考えていただいた。ドキュメンタリー作品の構成を感覚的につかむための訓練として、授業に取り入れるべき課題を具体的に提案していただいた。また、立命館アジア太平洋大学（APU）でドキュメンタリー制作実習を担当し、その後に大阪大学 GCOE（2007～2011年度）のプロジェクトを通して筆者にドキュメンタリー制作を教えてくださいました市岡康子氏（テレビプロデューサー／ディレクター）には、長きにわたるドキュメンタリー制作と、APUでの授業の経験に基づいて多くの助言をいただいた。さらに、桃山学院大学視聴覚事務室の吉村健一氏をはじめとするスタッフのみなさんにも感謝を申し上げる。映像制作実習室（2-303号室）および各種機材の管理だけでなく、学生に対して機材の操作を説明していただき、授業時間外の学生の自主的な作業がスムーズに行えるように便宜を図っていただいた。また最後になったが、この授業を履修して映像制作に最後まで真剣に取り組んだ学生のみなさんに、心からの感謝を伝えたい。

なお本稿の以下では、1日に連続して行われる1・2限の授業をまとめて「1回」の授業と表記する。つまり全30回の授業を、便宜上「全15回」に換算して表記している。

2. 「映像制作の専門家を養成するための授業ではない」

シラバスおよび初回授業で、授業の概要と目標を【1】【2】のように説明した³⁾。

【1】 授業の概要

映像制作実習では、実際にドキュメンタリー作品の制作を行う。少人数のグループに分かれ、企画をたて、事前調査の上でフィールドワークを行い、デジタルビデオカメラとコンピュータを使用して、10～15分の映像作品を制作する。授業外の作業を多く必要とするので、そのつもりで履修すること。

授業では半年をかけてドキュメンタリー作品を作る。しかしこの授業は、「映像制作の専門家を養成するため」のものではない。複雑な機材の操作や高度な編集技術は、各自の関心とレベルに合わせて自主的に学習してもらえばよい。この授業で設定している学習目標は、【2】のとおりより普遍的なものである。

【2】 学習目標

- ① ドキュメンタリー作品の制作を通して、社会に対して具体的な問題を設定し、物事を様々な視点から考え、その成果を表現することを学ぶ。この過程で、自分と社会との関わり方をそれぞれのやり方で経験的・実践的に学び、理解する。
- ② メディアリテラシーの重要な部分を、制作を通して直接的に理解し、身に着ける。

授業では、ドキュメンタリー作品の制作に必要な作業（調査・撮影・編集・公開）に、「何を伝えたいのか」、「誰（自分が何者として）が、誰に、

誰のことを伝えるのか」,「どうすればそれは伝わるのか」を考えながら取り組んでいく。「私たちがふだん何かの映像を見て、特に違和感を持つこともなく、その内容を難なく理解できているのはなぜなのか」,「そうした映像作品は、どのようにして制作されているのか」,「映像を介したコミュニケーションにはどのような特徴があるのか」,「映像メディアを利用する際に、どのような注意が必要なのか」。ドキュメンタリーを自ら制作しようとするならば、その過程でこれらの問いに取り組まなければならない。それは、社会とメディアについて改めて考え、調べ、その成果を表現することである。さらにそうした一連の過程において、撮影対象や同じ班のメンバーや興味をもって作品を見てくれる人といった様々な立場の他者とのコミュニケーションを深めていくことになる。これが授業を通した学びのもっとも肝心な部分である⁴⁾。

はじめの授業では、短い映像資料をいくつか事例として紹介しつつ、さらに次のような問いを提示した。「一般的に映像は『言葉よりも伝わりやすい』と考えられがちだが、そうなのだろうか」,「ドキュメンタリーは『事実をありのままに、客観的に描いたもの』とされがちだが、果たしてそうなのか」。ドキュメンタリー制作に実際に取り組むこととは、こうしたドキュメンタリーをめぐる根本的な問いについても具体的に考えていくことを意味している⁵⁾。

3. 授業と映像制作のプロセス

3-1. 班分け（第1回授業）とテーマ設定（第2回授業）

授業初回ではアイスブレイキングを兼ねて、学生ひとりずつに「好きな映画」もしくは「行きたい国（つまり「異文化に対する関心」）」についての説明を交えながら自己紹介をしてもらった。そのうえで班分けを行った。仲の良い友人同士で固まってしまうようにして、3～4名からなる班

を5つ作り、これをA～D班とした。ただしC班は、3名中2名がごく早い段階から授業を欠席するようになったためまもなく解散し、残った1名はD班に合流した。その結果、全4班となった。

次にテーマの設定である。この段階では、「具体的に、誰を撮りたいのか」「その人のどのような側面を撮りたいのか」「なぜそれを撮りたいのか」という項目を立てて、班ごとに議論をしてもらった。教員からは、「既につきあいのある人物（友人、家族、近所の人など）に改めて向き合ってみる」、「自分の得意とする語学の能力を活用して情報を集めてみる」、「自分の関心・趣味を手がかりにそれをさらに深める」、「お気に入りの映像作品を参考にする」など、どのような方向からアプローチしてもかまわない、と伝えた。「現在の自分が既に持っているもの、あるいは少し手を伸ばせば届きそうなもの」を自由に活用してアイディアを出すようにと助言した。

また実際のドキュメンタリー作品を参考資料としていくつか紹介した。たとえばディレクターが自身の家族を撮影したドキュメンタリーの例として、『エンディングノート』（監督：砂田麻美、2011年）、『home』（監督：小林貴裕、2001年）を紹介した。「ごく身近な家族など、どのような存在でもドキュメンタリーの対象になりうる」とことと、「自分の身内をただ撮影したというのではなく、なぜそれらの作品が多くの人を惹きつける作品になりえたのか」を考えてもらった。また、大阪の釜ヶ崎を題材にした、制作年代や目的が異なる複数の映像（1961年と1990年の暴動についての当時の報道、近年制作されたアーティストによるミュージックビデオやドキュメンタリー、助成金をめぐる問題で注目されることになった劇映画など）を紹介し、同じ題材でも描き方はひとつではないということを説明した。

テーマを考える際のもっとも重要なポイントとして、何を選ぶにしても、「これまで自分が当たり前だと思っていた日常生活からはみ出してみること」を意識するようにと伝えた。映像制作を進めた結果として、「自分の

日常生活がそれまでとは何か違ったものに見えてきたならば、授業の目標を達成できたことになる」と説明した。この授業を通して「異なる文化や他者との出会い」を経験し、自分とは異なる「他者」の「生き様」に触れて、そこから自分のこれまでの世界の見方が変わるような、社会との関わり方を考え直すようなきっかけをつかまえてほしいと伝えた。

こうして各班は、具体的な撮影対象とおおよそのテーマを設定した【3】。どのテーマも、大学内の友人や知人を対象にしたものとなった⁶⁾。まだこの段階では、「その人物のどのような側面に注目し、何を描き、見る者に伝えたいのか」ということが曖昧で、作品の意図は漠然としていた。後で述べるとおり、いずれの班も、最終的にはこの時点のものからテーマや撮影対象へのアプローチが大きく変わっていった。

【3】 各班の初期のテーマ

- A 「SAINT スタッフ」のやりがい
- B 在日中国人に対する差別を批判する
- C 大学内の喫煙者が考えていること（＊この班は後に解散）
- D YouTuber の日常と将来
- E プロサーファーになる夢を追いかける若者の姿

3-2. 企画書作成と発表（第3回授業）

班内で議論を進めて、テーマと撮影対象に関連する簡潔な「問い」の文章を複数作成してもらった。メンバー各自がそれらの「問い」からひとつを担当し、班内での議論や文献調査、撮影対象への聞き取りを通して、「問い」に対する現段階での「答え（結論）」を見つけ出し、900字程度のレポートにまとめて提出してもらった。

このレポートを課した意図は、具体的な目的や計画を持たずに漫然と撮

影を開始してしまうのではなく、ごく限られた時間ではあるが一定の事前調査を行っておくこと、また、メンバーそれぞれが他人任せではなく自主的に作業に取り組むように促すことだった。「そのテーマについて、これまでにどういう語られ方・描かれ方がされてきたのか。それを踏まえて、自分たちはどう描くのか」を考えながらレポートを作成するように指示した。ただし結果としては、レポートの多くはごく表面的な情報を並べたものになってしまい、撮影対象や関連する問題についての理解を深めることにはうまくつながらなかったようだった。

ここまでの作業を踏まえたうえで、【4】の形式で「企画書」を完成させ、提出してもらった。

【4】 企画書の内容

① テーマ

作品のメッセージ、表現したいことを、簡潔に1文程度で書く。
(そのうえで、補足的な説明を簡潔に書く。)

② 具体的な撮影対象

どのような人物を、どこで、どんな話題に焦点をあてて撮影するのか。どのような場面や物語を撮影するのか。

③ 作品の構成

作品全体のおおよその流れと、各パートで必要となる映像について。

④ 作品の仮タイトル

各班がそれぞれの企画書の要点を発表し、参加者全員で議論して、内容を吟味した。

3-3. 撮影練習（第4回授業）

このタイミングで、ビデオカメラによる撮影に慣れるための練習を行った。基本的な操作を説明したうえで、【5】の要領で班ごとに撮影を行った（1限）。

【5】 撮影練習の手順（各班で行う）

- ① 班内で役割（撮影係、インタビュー対象、インタビュアー）を決める。
- ② テーマ「私の大学生活」。具体的に「どこで」「何を」「どんな語りを」撮るかを予め考える。
- ③ 最低4カット以上を撮影する。

編集ソフトは使わずに、撮影した映像をあとでそのまま上映する。
上映する際のことを意識して、構成を考えながら撮影すること。

上の③のとおり、この作業では、編集は行わずに撮影した映像をそのまま上映することにした。一定の制限のもとで、何らかの「物語」が伝わるような映像の構成を考えて撮影してみることがポイントだった。限られた授業時間の中で、ただ撮影することだけを意識するのではなく、企画についてよく考えたり、どのような映像を撮影する必要があるかを具体的に意識したりしてもらおうとした。映像の順序やそれぞれの長さ、全体の流れなどを考えながら撮影することは、後に取り組む編集作業の訓練にもなったはずである。

あわせて、映像撮影について基本的な注意点を伝えた【6】。

【6】 撮影時の注意

- ① 「何を撮りたいか」をはっきり意識すること。
画面に何が映っているか（映り込んでいるか）に注意する。

ドキュメンタリー制作を通した学びの可能性

カメラはきちんと固定する（せわしなく、むやみに動かしすぎないこと）。

② 「どう撮るか」をよく考えること

撮影対象の顔、表情がはっきりわかるか（角度、明るさ）。

音声は聞き取りやすいか（雑音が入っていないか）。

ズームは極力使わない（アップを撮りたければ、対象との距離を実際に詰める）。

こうして第4回授業の前半（1限）を使って、大学内の思い思いの場所で撮影を進めてもらった。後半（2限）で実習室に集合して上映会を行い、全員でディスカッションをして、撮影と編集について心掛けるべきことを確認した。

市岡氏に相談した際に、「撮影・編集方法についての教科書やマニュアルで、おすすめのものがあれば教えてほしい」と尋ねてみたところ、文章を読んで学ぶよりも、実際に撮影してみたその映像に対して「どこがわかりにくい」「対象をどのように撮るべきか」「どんな映像を撮るべきだったか」を具体的に助言する方が、はるかに効果的で効率的だということだった。筆者自身もそのような経験をしていたので、そうした手順で授業を進めた。

撮影練習を行った第4回授業（4月26日）と、次の第5回授業（5月10日）の間には5月の連休が入るため、2週間空くことになっていた。この間に企画に沿って撮影を開始し進めてもらいたかったので、第4回授業の終了時点で撮影練習を完了するとともに、具体的な企画をとにかく完成させてもらった。さらに、各班の進捗状況を確認したうえで、多くの学生の要望に応じて第5回授業を「自習」にすることにした。第6回授業までの

3週間で、各班で自主的に撮影を進めておくように指示した（ただし第5回授業当日は、教員は実習室に待機して質問に対応できるようにした）。

このころから個人や班の間で課題への取り組みや進捗状況にかなり差が出るようになってきた。対策として、メーリングリストを作成して活用することにした。各自の提出課題の内容や、質問とそれに対する教員からの回答・助言をオープンにしておくことで、各自が他の学生や班がどのようなことに取り組んでいるのかを把握できるようにして、互いに刺激を与え合えるような環境をつくろうと試みた⁷⁾。

3-4. 試写と再撮影・編集（第6回以降、第14回授業まで）

第5回授業は自習としたが、一部の学生は実習室に来て、撮影した映像を確認したり、教員に助言を求めたりした。B班（「在日中国人の友人が考える自身の将来」）はこの時期までにいったん一通りの撮影を試みており、撮影した映像を教員に見せてくれた。企画と撮影計画がまだ曖昧だったために、完成作品に使えるような映像は少なかったが、大学の外に出て繁華街やラーメン店の中といった様々な場面での撮影に挑戦しており、これから取り組むべき具体的な課題の整理をすることができた。B班は毎回の授業に必ず何らかの成果を持参し、スケジュールに沿って着実に課題をこなしていった。他の班に常に刺激を与え、授業全体を引っ張ってくれた。

第6回目の授業では【7】の手順で「試写」を行うとし、3週間かけて準備を進めておくように指示した。

【7】 試写 1

各班が撮影した映像をみなで確認する。撮影済みの映像を整理したうえで、「作品の核となりうる」映像（「これはよく撮れている」「作品にぜひ使いたい」と思える映像）を事前にピックアップし、すぐに

上映できるように準備しておくこと。ひとつの動画ファイルの一部であれば、該当する場面からすぐに再生できるように、開始のタイミングを把握しておくこと。

試写を踏まえて議論し、企画を再検討して追加撮影計画を考えてもらう。

この試写のときまでに、連休期間を入れて「3週間をかけた」作業だとわかるような何らかの成果を準備してくるようにと指示した⁸⁾。試写を済ませたあとは、【8】の手順で編集に取り組んでもらった。

【8】 編集

- ① 編集用パソコンに映像を取り込み、編集できる状態にする。
- ② 試写1の際に選んだ「作品の核となりうる映像」の前後に、関連する映像をつなげて、いくつかのシークエンス（一連の流れに映像をつなげたもの）を作成する。
- ③ ②で作成した各シークエンスの並びを考えつつ、作品の具体的な構成を改めて考えて、編集を進める。

ビデオカメラと編集ソフト（Adobe Premiere Elements）の操作そのものの習得には、ほとんど時間はかからなかった。学生のうち何名かは映像編集の経験が既にあり、教員からはごく簡単な説明を適宜行うだけで事足りた。

それよりもはるかに多くの時間を要したのは、「どのような作品を作るのか」を考えて、企画の内容をより明確なものにして、具体的な撮影計画を組み立てる作業だった。【8】をすべての班がひととおり終えるまでに

はかなりの時間がかかり、ほぼ1か月を要した。この間にE班（「サーファー」）は当初の予定を中止して、それまでとはまったく別の企画と撮影対象（語学教員）に変更することになった。

この段階で学生の多くはまだ、「企画がまだ曖昧なので、もっと具体的に」という教員からの指示がよく理解できていなかったようである。撮影対象をともかく決めて撮影を試みるものの、「インタビューをしてみた」「撮影してみた」というそれだけで、作品には使いようがない映像を撮影してばかりだった。この時期のインタビュー映像の多くは、構図が見づらく、やりとりも紋切り型で、一問一答形式の会話が断続的に続くようなもののばかりだった。撮影対象と聞き手との関係性もわかりにくく、物語としての展開や深みを欠いていた。そうした問題点をひとつひとつ、実際の映像をもとに説明していくと、学生からはしばしば「それではどうしたらよいのか」という問いが返ってきた。これに対して、『『どうしたらよいか』は、自分たちで考えるしかない』、「そもそも企画が明確になっていなければ、助言のしようがない」と答えた。

考えるためのヒントとして、「テレビのニュース映像（10分程度）をもとにその構成台本を作る」という作業を課題として経験してもらうことにした。短いドキュメンタリーの一場面でも、いくつもの撮り方を駆使した性質の異なる映像で構成されていることを確認してもらった。作品を作り上げるため、作品を構成する各パートをつくるために、まずはどれだけ多くの、様々な種類の映像が必要であるかを理解してもらおうとした⁹⁾。また、ドキュメンタリー作品『LIFE IN A DAY』（監督：ケヴィン・マクドナルド、2011年）の一場面を上映して、「被写体の生活環境が、言葉による直接的な説明が一切無いにもかかわらず、見る者に効果的に伝わってくる」ということを実感してもらい、「言葉ではなく、映像で伝える」とはということなのかを感覚的に理解してもらおうとした。

2 回目の試写では、「作品の全体像を示せる状態のもの」を上映してもらうとした【9】。

【9】 試写2

できあがった複数のシークエンスを構成に沿って配置し、最初から最後までカットをつなげた「作品の全体像」がわかるものを準備しておくこと。それを上映し、ディスカッションを行う。

試写を踏まえて、作品として「流れ」が出来ているか／出来そうかを確認し、「どの映像を切るべきか／どのような映像を追加するべきか」を具体的に検討していく。重要なことは、「作品で描きたいこと（目的）」をはっきりさせ、そのうえで「構成」をはっきりさせることである。

作業が遅れている場合は、企画書をじっくり再検討して作り直すこと。そのうえで「構成」を改めて考えて、これに照らして必要なシークエンスを洗い出すこと。

なおこの試写の段階では、音声の調整、字幕・タイトル入れなどの加工は基本的にはせずに、カットを単純につなげた状態のものを用意すること（後でカットを削ったり追加したりすることになるので、現段階で細かい加工をしても時間と手間の無駄になる可能性が高いため）。

各班とも、どうにか試写にこぎつけていった。ただ初めての試写の際には、自分たちが作成した映像が流れるスクリーンやモニターを見つめるばかりで、「見ている人の反応」をまったく観察しようとしなかったことがあった。上映中は、映像を見ている人々の表情や反応をよく観察し、「どのような場面で面白そうにしているのか／つまらなそうにしているのか」をよ

く確認して、「なぜそうなのかを考える」ことが大切であると説明した。

この段階で、インタビュー、撮影、編集の各作業について、どの班にも共通する重要なポイントを強調した【10】¹⁰⁾。

【10】 試写を踏まえて撮影・編集を進める際に注意すべきこと

① インタビュー

相手に聞きたいことを自分で意識してストレートに聞かなければ、ぼんやりとしたやりとりになってしまう。とはいえ特定の言葉を引き出そうとしすぎると、「いかにも」なインタビュー（報道型、紋切り型、詰問、誘導尋問）になってしまう。「聞き取り」というよりも相手と「会話」をするつもりで進めると、よいインタビューになるだろう。撮影対象の印象的な表情や言葉が撮れている映像、すなわち「よいカット」がなければ、そもそも作品を作ることはできない（こうしたカットがないとシークエンスが作れず、シークエンスがないと作品を構成できない）。

② 撮影

誰かにしっかり見てほしいならば、自分がしっかり撮らなければならぬ。「10秒撮る価値のない映像は、最初から撮らない」ということを基準にして、ひとつひとつのカットを撮影すること。

また編集を意識して、次のことに注意するように。「各カットのはじめと終わりに6-7秒数える」,「ズームインしたら10秒数える」,「パンのはじめとおわりには、必ず『何か』を撮影する」。これらができていないと、結局編集で使うことができない。

③ 編集

第三者が容赦なく「切る」ことが、作品の完成度を高める。撮った人・作った人にとっていくら思い入れのある映像でも、作品の本質や全体の流れに対して意味がなければ、作品に使うことはできない。むやみにただ短くすればいいわけではないが、「切れば切るほどよい」というつもりで編集すること。もちろんこの作業を意味あるものにするためには、「どうしても切れない」と思えるようなカットをできるだけ多く撮影しておく必要がある。

以降の授業では、試写を踏まえて企画を再確認し、再撮影と編集を行い、次週にさらに試写を行う、という作業を繰り返していった。一連の作業を着実に進めたB班の場合は、完成に至るまでに4度の試写を重ねることができた。

試写とディスカッションは、回を重ねるごとに有意義なものになっていった。教員ではなく、他の班の学生から指摘されることによって、「今の映像では伝わりにくい」のだと素直に納得するといった場面もあった。YouTuberの友人を撮影していたD班は、試写を繰り返すうちに企画書を時間をかけて改めて練り直し、「撮影対象の友人としての会話」を積み重ねて彼女の日常と将来の夢を描くという方針を明確にした。その後は、インタビューの場面を含めてとても生き生きとした表情を撮影できるようになり、試写のたびに魅力的な映像を持ってくるようになった。「SAINT スタッフのやりがい」を撮影するとしていたA班は、最初の段階でいわゆるありがちな「PRビデオ」の作成を目標として設定しており、このイメージから離れられずにいた。紋切り型のインタビュー映像が続くので、試写でも思うような反応が得られなかった。しかし他の班の作品を見て議論を繰り返すうちに、「ひとりの大学生が、SAINT スタッフとしてのアルバイ

トを通して何を得ていったか、どのように変わっていったのかを描く」という企画に変更した。それからは見応えある映像を撮影してくるようになり、試写でもよい反応が得られて、当初の予定とは異なる新しい作品の完成に大きく近づくことができた。

このような試行錯誤を繰り返すことで、多くの学生が「どのような作品を作りたいのか」を明確に意識するようになり、そのためには「どのようにインタビューをすればよいのか、どのように撮影をすればよいのか」を深く考えるようになっていった。映像制作の楽しみを味わえるようになったことで、毎回の議論もしっかりかみ合ったものになっていった。

4. 作品の完成と上映、ふりかえり

4-1. 上映会（第15回授業）

第14回授業で最後の試写を行い、それを踏まえて最終的な仕上げを進めた（場面の切り替わりでの映像と音のつながりを調整する、作品の冒頭と最後にフェードインとフェードアウトを入れる、タイトルとクレジットの画面を用意して挿入する、など）。

最終回の第15回授業を「上映会」とした。企画を途中で大幅に変更したE班も、最終的には一定の長さと内容を備えた作品を間に合わせて、上映することができた。上映後のディスカッションを踏まえた細かい修正を施したものを、完成作品として提出してもらった。完成した4作品のタイトルは【11】のとおりである。あわせてこの日の授業では、肖像権・著作権に関する文書を作成してもらった。

【11】 完成作品タイトル

A 『大学生海くんの変化』（8分）

B 『国籍にとらわれない将来』（13分）

D 『女子大生 YouTuber の実態』(11分)

E 『由比先生のインドネシア物語』(5分)

スケジュールに余裕がなくなり、仕上げについての説明と作業のための時間が限られたために、タイトルの付け方も含めて完成作品にやや粗さが残ってしまった。しかしそれでも、授業開始当初に比べて学生たちの様子や撮影・編集した映像に飛躍的な変化が見られたことをもって、この授業の目標は十分に達成されたと考えている。試写後のディスカッションは、回を重ねるごとに鋭い指摘が多く出るようになり、生産的なものになっていった。撮影・編集・試写を繰り返すことで、映像に映し出される登場人物から受ける印象は、格段に魅力的なものになっていった。学生たちの試行錯誤と地道な努力の成果が、こうした変化に確かに表れていた。

4-2. ふりかえり (第15回授業)

第15回授業の最後に、授業全体をふりかえって意見を述べてもらった。学生たちの授業に対する最終的な満足度は、全体として高かったようである。教員が気づけなかったところで班のメンバー同士の関係がかなり険悪なものになり、しかしそれを修復して関係を深めて作業を進めていったということや、企画を大胆に変更した焦りとその後に盛り返せたことに対する自負と満足感などが聞かれた。

授業終了後にごく簡単なレポート【12】を作成し、メーリングリストに提出してもらった。

【12】 映像制作実習レポート (2019年度)

以下を簡潔にまとめる。

① 『作品タイトル』

- ① 制作した作品に対する、自分なりの評価。
- ② 班で自分が担当した具体的な作業の内容およびその自己評価。
- ③ 実習全体を通して自分が考えたことや得たものについて。
- ④ 班内の他のメンバーの優れた働きについて、特に記しておきたいこと（もしあれば）。

レポート作成にあたっては、「自分たちの作品の不十分な点を自覚することは大事だが、いたずらにけなさないこと」、また班内の他のメンバーをむやみに批判しないようにと伝えた。以上の説明をした際に、複数の学生から「教員が気づきにくいところで大きな働きをしていたメンバーに対する評価を盛り込みたい」という意見が出たので、当初は想定していなかった④を追加した。

全員が速やかにメーリングリストにレポートを提出し、授業は終了した。

5. おわりに：「映像制作実習」のこれから

既に決められた正解がひとつだけあるような作業ならば、そこに向けて最短のルートで、最小の労力で、機械的に近づけばいい。その作業を他人に任せてしまってもいい。しかし映像制作のような作業には、そうした性質の正解はない。自分で苦労しながら、時間をかけてそれぞれにとっての正解を作り上げていくしかない。

「せっかくがんばったのに、周りが評価してくれない」ということは、映像制作の過程にはつきもので、ごく当たり前のことだと覚悟しておく必要がある。日常生活においても自分の思っていることの大半は他人にはなかなか伝わりにくいものなのだから、映像でそれがうまくできなくても当然である。しかし、映像を効果的に使うことができたときには、それまで誰にも、どうしてもうまく伝えられなかったことを、鮮烈で印象的な形で

ドキュメンタリー制作を通した学びの可能性

伝えることができるかもしれない。それができたときの達成感と喜びを、映像制作実習に打ち込んだ学生たちには味わってもらえたのではないだろうか。

今年度の授業を教員も学生も納得のいく形で終えることができたのは、参加学生に恵まれたということが大きい。映像制作に強い関心を持ち、すでに映像制作の経験がある学生が複数いたことは大きかった。他の学生たちも、それぞれの個性や能力を発揮して、新しいことに粘り強く取り組み、映像制作の過程を大いに楽しんでくれた。次年度以降も様々な学生が参加して、この授業を盛り上げてほしいと心から願っている。

注

- 1) [南出・秋谷 2013, 南出・木島編 2018] を参照。
- 2) [田沼 2017] ほか参照。また田沼氏には、大阪大学 GCOE「コンフリクトの人文科学国際研究教育拠点」(2007～2011年度)の「映像作成による人文科学のコンフリクトの国際研究教育の可能性」プロジェクトにおいて、筆者自身が映像制作を学ぶ機会を設けていただいた。
- 3) なお成績評価については次のように説明した。「映像制作の作業過程と成果の発表から総合的に評価する。作品の完成と発表は必須。欠席が3分の1を越えると成績評価の対象外とする(遅刻は3回で1回の欠席扱い)」。
- 4) 授業の冒頭で「映像制作の専門家を養成するための授業ではない」と強調しておくことは、市岡氏の授業方針に倣ったものである。テレビディレクター／プロデューサーとして活躍してきた市岡氏の授業には、ドキュメンタリー制作やマスメディアへの就職を希望する学生が多く集まったことだろう。市岡氏は、学生たちのそうした期待を授業冒頭でいったん否定したうえで、撮影に入る前段階の「調査の重要性」を何よりも強調し、こうした時間と手間のかかる作業に取り組む意欲を持たない学生の参加を制したという。ドキュメンタリーの制作は「事前調査が50%」という、市岡氏自身と、その師である牛山純一氏の思想に基づいての方針である。[市岡 2005, 鈴木 2016] を参照。

- 5) ドキュメンタリー制作をめぐるこうした議論については、例えば[森 2005, 想田 2011]を参照。授業においてもこれらの文献と監督作品を紹介した。
- 6) A班の「SAINTスタッフ」とは、桃山学院大学の学内アルバイトのひとつ。班のメンバーのひとりがスタッフとして働いていた。
- 7) メーリングリストは、授業開始直後から運用した方がよかったのだろう。
- 8) あわせて、3週間を何もしないまま過ごす者が出てこないように、途中で以下の内容で短いレポートを提出してもらった。【①グループの作業の進捗状況とそれに対する自分なりの評価を報告する。／②現時点でのグループの課題を、1文で簡潔に書く。／③②で示した課題についての説明および、その課題に対してこれからすべきことを具体的に書く。】このレポートは他人の目を意識しないで率直に書いてもらう必要があったので、提出先はメーリングリストではなく、教員個人宛とした。
- 9) この課題は小村氏に提案していただいた。映像の展開とつながり、ナレーションの言葉選びと配置、テロップの入れ方などを細かく「構成台本」として文字に起こす作業を通して、「ドキュメンタリー作品がどのように作られているのか」を具体的に、感覚的につかむことができる。
- 10) これらは、かつて私自身が市岡氏から制作の過程で受けた助言をもとにまとめたものである。

参 考 文 献

- 市岡康子『KULA——貝の首飾りを探して南海をゆく』, 2005年, コモンズ。
- 南出和余・秋谷直矩『フィールドワークと映像実践——研究のためのビデオ撮影入門』, 2013年, ハーベスト社。
- 南出和余・木島由晶編『メディアの内と外を読み解く——大学におけるメディア教育実践』, 2018年, せりか書房。
- 森達也『ドキュメンタリーは嘘をつく』, 2005年, 草思社。
- 想田和弘『なぜ僕はドキュメンタリーを撮るのか』, 2011年, 講談社現代新書。
- 鈴木嘉一『テレビは男子一生の仕事——ドキュメンタリスト牛山純一』, 2016年, 平凡社。
- 田沼幸子「社会人類学演習Ⅱ前期——初の試みとしてのインタビュー作品集」『人文学報』, 2017年, 513-2: 39-62。